



発行所 青山同窓会 新潟市関屋下川原町二 新潟高校内 発行人 齊藤希式 印刷所 オリオン印刷

東京青山同窓会報告 老若二百六十名出席

東京青山同窓会は、十二月二日東京丸の内日興証券ホールで総会を開催した。

本部から阿部副会長、斎藤幹事長、母校から古沢、沢山、岩野の三先生、本部事務局の岩田さんをお招きして、二百六十名の会員が一堂に集まった。

総会および総会後に開催された常任幹事会で決定した役員は次のとおり。

- 名誉会長 山内保次(七回) 会長 早山洪一郎(二八回) 副会長 古山利雄(二七回) 石崎重郎(二九回) 山添直(三〇回) 佐々木良明(五〇回) 幹事長 湊元克己(三〇回) 副幹事長 青山勇三(二六回) 同 河内直治(三八回)

元日忽忽(そうそう)から新潟は、三十八年に次ぐ豪雪の不意討ちに、お互いさま身辺いささかあたたかさせられた新年の開幕であった。

さて、昨年の本会の業績を回顧してみると、特筆すべきものが二つあった。

その一つは、『青陵健児の像』の建設(詳細は前号に既載)であり、いま一つは、東京青山同窓会の合同総会の成功である。

且つ、席上、東京新商同窓会から二人の代表者が出席されて祝辞を贈られたことが、特に印象に残った。一部に提唱されていた青山・葦原交歓の端緒を開いたものとして、その意義を無視することはできない。

この合同総会実現の功は挙げて五十回以降の幹事諸兄の数ヶ月に

今回の総会で目立ったことは、若い同窓生の参加が今までになく、会の新しい息吹きが感じられたことである。

只々感謝あるのみ、帰るところは執行部の責任として深く反省あらためて心から敬意と感謝を表すと同時に、新生東京同窓会の今後の発展が一層期待される次第である。

『青陵健児の像』の募金の結果については本号記載の決算書を参照

さいものがあった。宮尾先生は、心臓に故障が生じて秋頃になって相当発音の方にも

出陣され関係者が反って心配するほどだったが、やはりそういう先生の律義さがいつの間にか無理をきたしたか、近親の人たちさえも間に合わなかった全くの急変で、かえすがえすも残念でたまらなかつた。

先生のおよそ接する総ての人に対する暖かさ、親切さ、礼儀正しさ、宛然長者の風格を、今は静かに偲びたい。

一年を顧みて

幹事長 齊藤希式

青木先生が、筆者ら大正後期に母校に在学した者に与えた印象は正に一種のアイドルであった。

大正十年の創立三十周年式典に於ける先生の記念講演は、それほど強い影響をわれわれに与えたものだった。

『青陵健児の像』が起きた当時、先生は書翰を筆者に与えられて、『既に老齢八十を超えた身であるが、若く自分を必要とする場合は、何でも言って寄越してくれ』と激励された烈々たる気魄(はく)には、深く感銘された。

謹んで偉大な先輩を悼みたい。

青陵健児の像の募金につきましては、多数の同窓から好意を寄せていただきましたことに有難うございました。

収入の部合計二〇四四、五八六円

支出の部合計六三二、五八〇円

Table with financial data for the association, including income and expenditure sections.



総会の前に、『青陵健児の像』の除幕式があった。最後に参列全員の校歌の大合唱が晴れた前庭一杯に湧き起って、実にいい気分。

七月四日午後四時半より母校会議室で開催

一、挨拶 鎌富会長

二、挨拶 渡辺校長

三、会務報告 齊藤幹事長

四、東京報告 湊元克己

青山同窓会 総会報告

事務局メモ



# 全国征覇への道

46回 高橋 是成  
柏崎商業高校教師

## 一、柔道部の発足と

### 全国大会出場

明治二十八・九年頃生徒で「やわら」の型を演ずる者があつたと  
いわれている。その数年後に柔道  
部の創立がみられた。やがて講道  
館柔道がとりあげられるが三十九

年には星野正一、皆川馨らが京都  
の全国学生柔道大会に優勝したと  
の輝かしい成績が記録されている

## 二、雄飛

昭和七年四十回生の奮起は県大  
会の決勝に一一〇で芝中に惜敗し  
たがその芝中が全国大会に優勝し  
てゐる。「畿度か征覇雄飛を図り  
しも、さびしく破れて又來む春に  
振り立つ」と後輩育成の悲願に柔  
道部後援会を結成する。

# 栄光燦たり

## 特集



46回 柔道部

前列右より(故)後藤健⑤、厚地豊弘⑤、平島恵昭⑤  
後列右より(故)小野浩二⑤、(故)森賢次⑤、(不明)川村竹一⑤  
(故)旗野先生、高橋是成⑤、江口松弘⑤

「新発田を破り、高田を葬れ！」  
と檄を飛ばし日没後の道場に高張  
提灯をかかげての猛練習、味方村  
高念寺での合宿と情熱を傾けての  
指導が続けられたが正に柔道部中  
興の役を果たしたといわれるべきで  
あろう。

昭和十一年、里村清一参段(戦  
死)主将以下の精鋭は春五月近県  
柔道大会で優勝、今年こそはと全  
国大会に勇躍参加、強敵も次々撃  
破し決勝戦で帝京商業(東京)と  
対戦、武運拙なく〇―四と敗退し  
たが、後日相手校に卒業生が加え  
られていたことが判明し失格とな  
り優勝校なしと発表された。全く  
惜しい機会を失したものである。

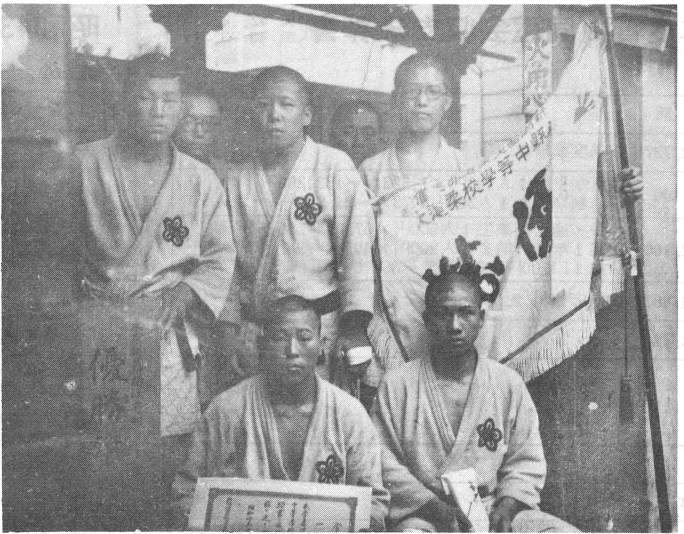
昭和十二年は渡辺正義二段(戦  
病死)以下四年生二名を入れた選  
手団で全国大会に出場し、準決勝  
で若松中に〇―一と惜敗す。

「風起らんとて天下静寂、飛躍  
せんとするものはまずその身をち  
がむとか、柔道部衰えたりと称す  
るものは未だ真にその何たるかを  
知らざるなり。見よ!! 新中柔道  
部の活躍を!!」と遊方会雑誌の一  
文より借用して昔日を思ふ。  
掌中にすべき覇権も空しく悲憤  
の涙を呑んだ先輩の屈辱をそそげ  
と日曜、祭日もなく肉弾相搏つ猛  
練習が続けられた。互に励ましあ  
い、練習の方法も研究し、自己流  
の技を身につけることも忘れな  
かつた。加えて先輩の厳しい指導に  
は時につらと思うこともあつたが、  
投げつけられ絞められながらも尚  
頑張るうち、いつか体力と気力と  
技術が養成されていった。

私自身のことを振り返ってみて  
も入学当初連日、目を回す程に投  
げつけられ夢中で過した一学期間  
二学期に初段になった頃ようやく  
人心地がついたよう周囲の様子  
も分りかけた。畏敬する上級生が  
対校試合に勝敗を争うのを見て一  
喜一憂し、やがて絶対負けたくな  
いと思ひこむようになり、学校以  
外に炎熱の暑中稽古、吹雪の夜の  
寒稽古に武徳殿に通ひ、家に帰っ  
ては柱に帯をしばつてのぶつかり

練習、腕立伏臥の補強運動等を休  
むことなく実行した。そんな無理  
がたたつて二年から三年と心臓  
弁膜症、脚気と静養を命ぜられ医  
者通ひもしたが幸い悪化するこ  
となく再び道場に居ることができ  
た。吾々の同期生も四年生の後半に  
は病気になる者や軍隊を志願す  
る者があつて選手に變動があり、  
いささか戦力低下と心配したが一  
応全員二段というメンバーが組め  
るところまで回復した。

観に任せられてか身体が重く、動  
きのぶかかった吾々も約一時間休  
みなしの練習に汗びつしより、よ  
うやく日頃の調子を取戻すことが  
できた。明ければ二十三日待ちに  
なつた。



「新潟医大主催、県中等学校柔道選手権大会修了  
直後の写真」  
決勝戦は長岡中学校と対戦。  
代表試合は五人全部出でた決戦でしたが、とう  
とう勝負がつかず、新潟中と、長岡中学校優勝と  
いうことになりました。  
前列、右より小野浩二⑤、江口松弘⑤、後列右  
より川村竹一⑤、高橋是成⑤、森賢次⑤

待った試合当日を迎えた。この日  
の為に鍛えられた力を余すところ  
なく發揮するだけである。新潟中  
が駆けつけた斎藤、池田両先輩、  
在京の里村、倉田、筒井等の先輩  
に力づけられながら試合場である  
早稲田大学体育館に入る。  
開会式―全国より参加した三百  
有余名の猛者連の中に入つて江口  
小野が背のびをしながらしきりに  
ポヤいてゐる。なんて大きい奴等  
が揃つたんだらうと。やがて四会  
場が試合が開始された。吾が校は  
一回戦  
二回戦  
三回戦  
四回戦

に勝利を決定。  
先鋒小野(弘腰 野尻初)  
四将高橋(返し 根頃初)  
中堅江口(背負 千明初)  
副将森(釣込 斎藤初)

大將川村(返し 小笠原初)  
日大中は一回戦五―〇と勝つて  
の進出であるが怒涛の如き吾等の  
前に屈す。試合時間一人十秒から  
一分の間、厚地マネジャーが記録  
を書くのに苦勞する程早く終つて  
しまつた。  
三回戦  
新潟中五―〇 錦城学園(東京)  
先鋒小野(釣込 荒川初)  
高橋(跳腰 山下初)  
中堅江口(腰車 植木初)  
森(大外刈 立石②)  
大將川村(合せ業 上原初)  
夫々に自己の持味を充分に發  
揮して、正に鎧袖一触の勢あり。  
四回戦  
新潟中 一―〇 秋田中(秋田)  
秋田中は桐生中、早稲田中、関  
東中を大差を以て悠々蹂躪し去つ  
た奥羽の雄である。然し選手が休  
んでいる間も先輩、マネジャー、  
補員が目ばしい学校の対戦成績、  
個々の選手の特徴などを克明に記  
録し、一人づつに教えてくれるの  
で、まずある程度の戦法を考えら  
れる余裕があつた。だがおそらく  
本日第一の強敵であり相手にとつ  
て不足はなからう。五名が相対し  
て礼をする際の「お願いします」  
の声にすでに殺意さえ感ぜられる  
となる。「彼に白虎の勇あらば我  
に不識庵の勢あり、彼山河襟帯の  
地に依らば我道海を以て背水の陣  
を敷かん」と熱戦は物づく死斗  
を展開するも両校の守り堅く、攻  
むれども崩れず引分けの連続。  
二回戦  
新潟中 〇―〇 若松商  
先鋒小野 引分 斎藤初  
高橋 引分 鈴木初  
中堅江口(背負) 引分 小林初  
森 引分 伊藤初  
大將川村 引分 芳賀初

大將川村(返し)引分 伊藤  
龍虎の決戦はオーダーを入替へ  
てついに三回目の決戦を迎えた。  
新潟中 二―〇 若松商  
先鋒小野 引分 斎藤  
若松の斎藤が連発する内股に小  
野ややせられたが、大内刈で  
四将高橋(返し)鈴木  
共に姿勢よく堂々と対戦、「我勝  
たざれば何人か勝たん、一死に万  
生を得ん」と高橋は内股、大内刈  
の連続技で攻める。鈴木あせり気  
味の内股にぐるをうまはずして  
引き上げるともにはずみをつけ  
て落せば一本となる。  
中堅江口 引分 小林  
組むや小林得意の寝技に引込む  
が試合経験も豊富で気力、技術と  
もに充分な江口には通せず。立上  
るや江口背負投、釣込腰と猛攻、  
第一回目に技有りをとつてゐるの  
で今度こそ一本をとチャンスを見  
るも引分け。  
副将森 引分 伊藤  
共に内股、大外刈の応酬をみせ

が極みならず。森の技を伊藤返して  
寝技に入りや優勢、押込み込に  
入つたところで森うまく返して立  
上る。伊藤更に大内刈と必死の猛  
襲も効果なし。  
大將川村(内股) 芳賀初  
一点を先取されてゐる若松の大  
將は果敢な両手にするが川村ガ  
ツチリ受けて動ぜず、芳賀沼のあ  
きらめて立上るところへ、「噴煙万  
丈、火山の如き古今絶無の左内股」  
に跳ねればたまたま投げ出される  
鮮かなり。熱戦に十五分、勝  
つて涙、敗れて涙、観衆また感涙  
を双頬に伝へて少年選手への饒け  
としたと当時の新聞は報道してい  
る。また古賀賢星氏(柔道の歌、  
作者)の試合評では、「...新中  
の優勝は技に變化があり移技の研  
究がよく生きていたためであるが  
その一致した意気は勝利への拍車  
であつた」これは諸先輩直伝の多  
彩な技と全国大会出場十年目とし  
て初参加以来の先輩の執念を引継  
いだ気力の充実がタフな健闘とな  
り初優勝に結びついたので信じ  
てゐます。

真紅の大旗を手にしても未だ夢  
心地で喜びは浮んでこなかつた。  
唯先輩の声援に感念願の全国制  
覇がやつと終つたんだという安堵  
感だけが湧き上つてくる。  
新潟へ帰つた時、中間審査の直  
前にもかかわらず多数の関係者の  
出迎えを受け大優勝旗を先頭に万  
代橋を渡り学校までの行進も印象  
に残る。あれから三十年、直接指  
導してもらつた先輩、感激を分か  
合つた選手も今は少ない。長い人  
生に何時か過去を振り返つて共に  
語ることのできる友があることは  
どんなに楽しいことか、日頃唯仕  
事にのみ追われてゐるような生活  
の中で思い出すだけでも血湧き肉  
躍る昔に戻り若返つた気がする。  
当時の選手も出場順で紹介  
小野浩二 二段 死亡  
高橋是成 二段  
江口松弘 二段  
森賢次 二段 戦後不明  
川村竹一 二段 戦後不明  
補員



# 故宮尾益一郎君を偲ぶ

13回 齊藤義臣

村松町教育委員長

畏友宮尾益一郎君逝く。昨年十一月二十八日午後六時半頃突然電話にて君永眠の訃報に接し愕然とした。去る十月三十一日午後、私が用務で出港の折、久振りに君を西大畑の病院にお訪ねした処、自宅で御休養中とのことで早速お宅に廻り御邪魔することは憚り、小生の近著回想録を御渡して辞去しようと思つたのであるが君は疾く病床より起き丹前姿で玄関に出て来られ僅か二、三分ではあつたけれど色々病状などを語り心臓の疲れで当分休養するとの話で私は深く意に介せず切角静養をお勧めして別れを告げたのである。その後一月を経ぬ今日俄然君の訃報に接するとは真に残念至極追憶の念禁じ得ざるものがある。

君は北浦原京ヶ瀬村の産。先代の医業を継いで新潟市に猫山宮尾病院の経営に当り爾来今日に至つたのである。享年七十二才、これからなお大いに為す有る偉材であつた。真に惜みても余りある次第痛惜に堪えない。

私と君との交友関係は新潟中学の同窓ではあるけれど当時は年代の相違もあり深く相識するところは無かつたが君が遊学のため上京され吾等が同窓の先輩後輩のために中村隆治氏等が吾等後輩のために營んで居られた本郷駒込曙町の不識庵に入寮せられ、同じかまどの飯を喰へ合うことになつてからである。当時の君は東京医学専門に学び、私は慶応義塾の塾生として三田に学んで居つたのである。君は温顔、しかし身体は頗る強健で角力をよくし寮の庭に造られてあつた土俵を常に賑わして居つたものである。角力のことであるが庵主佐藤政太郎氏は中学、一高、大学の角力で鳴らした因縁で不識庵の角力は仲々隆盛であつた。回向院の綾川閣(元小結で慶応相撲部の指南もされた)なども時折来庵、指導に当られたこともある。

現新潟市長の渡辺浩太郎氏なども当時慶応の相撲部で鳴らし宮尾君などの好き相手であつたと思う。その後数年君と私はその進む路を異にしたので遂に相会う機会を得なかつたのであるが戦後の二十一年暮れ私が帰郷以来今日に至る迄、時折新潟で或は青山同窓会、不識庵の同人会又は教育委員の会合などで語り合う機会を得て公私共、並々な厚誼に預かり日頃君の豊かな人格に深く敬意を払つて居つたのである。新潟に於ける君は前にも記した通り猫山宮尾で広く世に語り伝えられて居る整形外科の専門病院を経営し、君の手に依つて救われた人達は夙に幾方を以つて数えられるものと拝察する。私が郷党の親友、故後明五郎作氏の如きも県会議員当時、交通事故のため負傷入院、君の手

厚き治療を受け、また私の妹、五十嵐信子も君のお世話になつたものである。君の病院の応接間に掲げてある扁額「鬼手仏心」の名文字こそ君が如世の信条であつたかと思う。真に君の日常春風胎動たる面影はいまも私の眼底から消え去らない。君は異常な身辺の多忙を顧みずこの四、五年新潟市教育委員として戦後多事多難な教育行政に携わりその円満公正な人格により市民の絶大なる信頼を受けて居られたのであつた。私も偶々地方教育委員会委員として君と志を同うし、健全、明朗な次代の育成に微力を致して居つたので日頃君の教えに預り今後大いに君に負わなければならぬと心密かに期待して居つたのである。然るに今や君と

# 青木得三氏の断片

編集部

昨年八月、青木さんの訃報を知つて以来、なほしる青山の歴史的人物の中のお一人であつたので、適當の知人に追憶をお願ひしたい心がけながら、ついその人を得ることができなかつたので、編集部で各種の資料を尋ね当てて、一応のプロファイルをまとめてみることにした。



晩年の故人

青木さんは、母校第九回の卒業で、創立六十周年記念の「青陵回顧録」に寄稿されたご自身の回顧談に據れば、在学したのは明治二十三年四月から翌々年の三月迄の二年で、即ち旧制の第四学年、

第五学年を過ごしたわけである。新潟中学校へ転校したのは、裁

判官であつたお父さんの転勤に因るものだらう。ズバ抜けた秀才振りが殆ど伝説

に伝え、世に知られる為からも先生の筆跡による先生の歌碑を母校に建立することを、私はここに小杉一雄教授が「會津先生を偲びまつる」一文を新潟日報にのせられた冒頭の一節であるが、よく先生の偉大さを表わした言葉である。

この偉大なる會津八一先生は明治三十三年(七回)わが新潟尋常中学校を卒業された文字通りの大先輩である。ところが不思議かつ残念にも秋道道人會津八一の名前や業跡を知つて青山同窓なるを知らぬ者が案外におられるのである。

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

この歌も早大の庭に立つて学生時代を思い出して作られた

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

秋道道人會津八一先生がなくなつて本年(四十二年)にはや十三回忌の法要が営まれ、新潟や東京で先生を偲ぶ会が催しもたれたが、この意義ある年にこのような提唱をする機会を与えられたのも何かの因縁かもしれない。実は會津先生の歌碑を先生の母校である新潟高校に持ちたいという願ひは私の数年前からの宿題であつた。そしてこのことについて二人の先輩にご相談申し上げたことがあつた。

# 提唱 會津八一先生の歌碑を母校に

38回 近藤 圓

新発田市立五十六野中学校校長

その一人は坂口献吉先生だ。私はある縁で坂口先生にご交誼を賜わり、折にふれお訪ねしていたが話題はたいてい會津先生に関するものであつた。そんなある時、「新潟高校に會津先生の歌碑が欲しいと思ひますが……」とお伺ひしたところ、「ほんとうにいいことです。それには同窓会一致してやらねばなりません」と申されたが、この話も表面に出ぬうちに四十一年八月先生もまた他界された。

もう一人は阿部藤策先生(現明訓校長)で先生もまた會津先生の大ファンであり、当時母校校長として私の提唱に賛意を表された。先生と共に具体化を考えているうちに私も母校を去つて田舎へ転動したり、一方「青陵健児の像」の話と重なることなどで沙汰やみのまま今日に至つて居る。

「ただ一つの芸術でさえ、人の師となるまでに秀でることは容易でないのに、人の師などという生やさしいものではなく、現代の第一流をもつて自他に許し得るほどの仕事を、学芸の道において三つまで成就されたのが秋道道人會津八一先生であります。三つの仕事——美術史学、書道、歌道——の三つは雲表の高さと、測り難い幽明境を異にし、寂寥の念堪え難きを感じるものである。去る十二月五日、泉性寺に於て挙行された君の告別式に臨み君の霊前に御焼香を捧げたのであるが、其際各方面に亘り君を悼む数々の弔辞を拜聴し今更、君が世に尽された偉大な功績を偲び感慨深きものがあつた。



故宮尾益一郎氏

昨年八月、青木さんの訃報を知つて以来、なほしる青山の歴史的人物の中のお一人であつたので、適當の知人に追憶をお願ひしたい心がけながら、ついその人を得ることができなかつたので、編集部で各種の資料を尋ね当てて、一応のプロファイルをまとめてみることにした。

青木さんは、母校第九回の卒業で、創立六十周年記念の「青陵回顧録」に寄稿されたご自身の回顧談に據れば、在学したのは明治二十三年四月から翌々年の三月迄の二年で、即ち旧制の第四学年、

第五学年を過ごしたわけである。新潟中学校へ転校したのは、裁

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

このようにいきさつがあつただけに、早大と共に先生の母校であるこの新潟高校の庭に、先生の歌碑を建立することは、必ずや先生のお気持ちにも叶うことであらうと思ふ。

また先生が自ら申されたように先生ゆかりの学校として何よりの

奮闘にもかかわらず早大評議員会では「早大では幾多有名な歌人を出している。今、八一の歌碑を建立したとなつて空穂、御風、善慶、牧水、白秋、勇等の歌碑建立の議案が上程された時、これを容れなければならぬ、その先例を開き、学園内に歌碑が林立されることになるから見合せる」ということで否決された。先生もさぞ淋しい思いをされたことであらう。

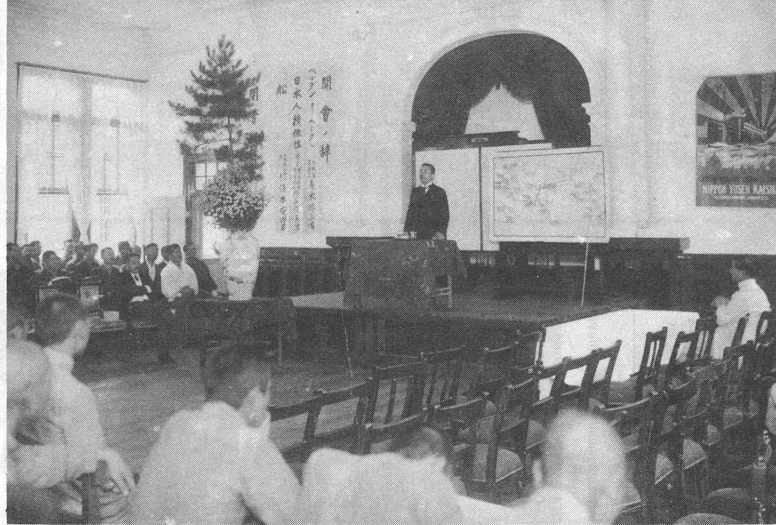
かゝる蓋世の英雄シーザーが追悼の爲めになしたる大演説を想つた。大正八年九月のはじめ、私は日本全権に随行して、巴里平和會議に臨んでおつたので、全権と共に念講演の講師として壇上に獅子吼

ふけたが、この時は、私はそれ以上に一層深い感慨にふけた。それから又もう少し離れた所に鉄條網を巡らした中に地中から鉄砲を持った俤、地雷火の爲めにうづめられたので、昔一米人がその銃を引っぱつたら、白骨になった腕が銃と共に抜けてきたので、そこへ鉄條網を張つて以後人がさわらないようにしたのであるとのこと。又近所には沢山の墓ありて、木の墓標に名前の知られざるフランスの兵士と書いてあつた。そこへ老夫婦がしきりと何かさがしながらやつて来た。余と同道せる藤中陸軍中佐はその理由を問うた。彼等は独り息子がこの戦争に召し出され、シャンパーニスの戦に目

出度戦死したが、死体が分らず今その遺骨をさがしに来たが何れにあるか分らぬとの事、中佐がそれはいくらさがしても分らぬでしょう。故にこの墓のうちどれか一つを、あなたのお子さんの墓として祈禱されたがよいと云つたので老夫婦は成程と思ひ直ちに祈禱する用意に取りかかつたことである。——中略——

泰西の人曰く「最もよきパンを与ふるは、最もよき政治なり」と國を治める最善の道は最もよきパンを与ふることにあつた。實に勝つた國にしてかくの如し。わが國はこの戦争に依つて大なる成金國家になつたと云うけれども独り日本は好景がどうして直ちに全世界の祝福であらう。

道はベルダンよりヘーグへと進まなければならぬ。——中略—— 私は、明治四十二年頃より平和に対する理想を持ち、四十五年私の母校なる帝國大学に於て「鴨緑江岸の月夜」と題して戦争より平和へと説いた。又大正九年第一の母校たる一高に於て「戦争より平和へと」と題して、又今日この私の最も愛する母校に於て「ベルダンよりヘーグへと」と題して、三度世界平和の理想を説く。諸君よ！戦争より平和へ、ベルダンよりヘーグへ進もうではないか。以上



三十周年記念式典で講演する故人

ベルダン要塞の司令官を訪問しました。

ベルダン要塞の司令官を訪問しました。



# 自由の中で

志 田 耕 吉  
新潟高等学校 教諭

## おことわり

ここに取上げますことは、当世高校生についての事例の、しかも一端に過ぎません。これだけで現代高校生すべてを切り切られましては、筆者のみならず、全国の高校生諸君が迷惑することになります。その点はお含みおきいただきたく存じます。

## (一)

某年某月某日、某高等学校の某クラスで、「制服はいかにあるべきか」とな議論で討論が行われたと思し召せ。司会者からこんな問いかけがありました。

「散歩などで外出する時、制服制帽で出かける人は、どれくらいいますか」と、五十人の中から二・三人がパラパラと手を挙げました。

「あとの人は？」

「ジャンパーとかセーター・スポーツシャツ、その時によっていろいろさ。自由な服装でことだね僕は」

「ここで「その通り」という声、多数。

「それではなぜ外出に制服を着ないか。理由をいってください」

「大体、散歩なんてリラックスするためだろ。詰襟で首められて窮屈がついたんでは、散歩の意味ないよ」

以上の問答でわかりの通り、現代高校生の相当数は、制服を登校用のものと限定しているようです。つまり、通学服と呼んだけれども、名と実を一致させることにならざると思えます。そうなりますと、夏休みでも冬休みでも日曜でも、某高校の生徒は町であまり見かけないが、あそこの生徒はみんなうちで勉強しているんだろな、などとおっしゃっていただいても、教師といましては、

いささかすぐぐつたいわけですね。生徒の方は「あまいんだね」くらいに考えて、にやにやしているかもしれません。ところで、この現象はなにも某高校だけに限ったことではありません。現に筆者は夏休み中に、街角でバスを待つ間、やれた服に、ハンドバッグなどさげた若い女の子のイカシタスタイルが、某女子高校の生徒たちの外出姿であることを、彼女らのその時の会話から知ったという機会に数回めぐり合っています。

こうなると、「詰襟が首をしめる窮屈さ」などは、もはや理由にはならないことにお気づきでしょう。女子高校の制服で、首をしめる詰襟なんて、聞いたためしはありませんから。

## (二)

某日の朝、某高校の某クラスで一人の生徒が遅刻してきました。すでに最近回数遅刻しているの某先生は、注意を与えます。

「君、けさもまた遅刻したな。どうしたんだ」

「はあ、しました。どうしたって別にさうさうしい奴ではなくてごく普通の生徒です」

「どうして遅刻したか、理由を聞いているのだ」

「理由って別にないです」

「なんともえないの知れない怪物という感じで、時間を少しかけて聞いてみますと、遅刻してやろうなどという意図は毛頭ない、ただいつもの如く家を出て、学校へ行って来た、たまたま始業時刻を過ぎていた、それは極めて自然な成行きで、いわば時間の経過に伴って流動する一種の自然現象と同様のことである。この現象が、ここの一週間のうちに数回、断続的に起きただけである。という結論に達しました。これなどは、自然派とも呼ぶべきでしょうかまた某高校の先生の言によれば

「遅刻も欠席も、本人が自分の責任においてやる限り、別に何も支障はないはずだ。それを先生が叱つたり、何かするなんて、ナンセンス」と揚言する、無軌道型もいるそうす。

某高校の生活指導を担当しておられる先生は「遅刻したら、なぜ悪いんですか」と反問されたことがあると嘆いておられました。これにいたっては、居直り型なのか懷疑型なのか、それとも単純卒直型なのか、判断に迷うところす。

これらの遅刻者連言集に記載される人物は、いずれも一種の精神的特異体質の所有者で、将来は知らず、現在のところ稀少価値の故に珍重されている程度ですが、大方の遅刻者諸君にも、これら特異人物との間に共通の性格が潜在していることは認めねばなりません。おのれ自身をきびしく律していることとする自己統制力の欠如、おのれの属する集団に対するおのれが責任を忘却した、集団感覚の喪失、これらはその最たるものではないでしょうか。(ここでは某市における交通事情の悪さという遅刻問題と不可分の関係にある事実は除きました。それは、筆者に遅刻の理由調査をする意図がなかったからです)

さて、この辺でまことに恐縮ですが、教師という職業人に特有の悪癖につきあつていただきたいのです。悪癖一それはすぐに試験をしたがることです。

問題一、制服から遅刻にいたる事例に共通する現代高校生の特質を述べよ。

いかがでしょうか。さまざま解答を見せていただけたことと思えますが、共通点と抽出されていたら、すべて満点といたしましよ。ここでは解答例を一つだけ、ご参考までにお目にかけます。

「彼らは束縛を嫌う。制服による束縛、時間による束縛、その他自己を束縛するものを、すべて遠ざけようとする。そして、解放された抵抗感のなくなった、自由な生

活することを望んでいるように見える」いや悪問悪答でした。もしこの愚答をお認めくださる方々は、次をどうぞ。

問二、極楽浄土のやりきれないほどの退屈さを描写した小説の題名と作者名を記せ。(失礼いたしました) 極楽が実は地獄なのだということ、事前に察知する能力が人間にないとは信じられません。極楽即地獄などという、いかにも奇を衒う逆説のように聞えるかも知れませんが、そんなつもりは毛頭ありません。亀井勝一郎氏が、詩人中原中也を評論した文章の中でこう言っています。

「青年時代は誰でも自由を求めるが、自由のつらさを身にしみて味わう青年は少ない。大切なのはその時の強い意志力だ」

また、こうも言っています。

「生活上の無頼派には誰でもなれる。不良少年じみて、青春の気分を味わうことはできるが、大事なものはその造型化である。青春に、「形」を与えることである。

氏は、中原中也が無頼の生活を送りながら、強い意志力によって自己のシニカル・ムント・ドラマの中から、折りと悔恨に発した、驚くべき清純な詩を生み出していることを説いているのです。私は、青年諸君がみな詩人になることなど要求はしません。しかし、私も言いたいのです。

「君たちは、自分の持っている自由、というのか。自由を土壌として、そこから何を生み育てようと考えているのか」

いや、それより以前に、「一体、君たちは、現在の自由の中から、何かを生み出そうとする意欲を持っているのか。その意欲を具象化するのに必要な、強い意志力があると断言できるか」

「何ものをも生み出すことのない自由、不毛の自由、その中でふやけているだけではないのか」

自由の中にただ浸っているだけの生活には、必然的に停滞と頹廢の毒気が広がります。そういう世

## 五十一回生

### クラス会

於 金 寿

例年十一月の最終土曜日を、クラス会の日と定めて来た第五十一回生の会合が、予定通り十一月三十日の土曜日、金寿において開かれた。藤沢光雄、藤田佐市、木村晋、阿部達平、飯塚正雄の諸先生の御参列をいただき、集まる者四十二名、東京、加茂、白根、芝田からの遠来の諸兄もあり、極めて盛会であった。この例会の日を忘れず四四年度の会合には互に誘い合せ、元気な姿で語り合いたい。(加藤昭一)

## 青山四十一回

### 同期会

於 平安閣

新潟地震以後久方振りになり七月二十七日新潟市平安閣で金沢緑郎、加納頼良両先生を迎えて青山第四十一回同期会が開かれた。

参加者二十八名。殊に遠路はるばる東京より馳せ参じた阿部久二君を初め、県内各地より集まり、卒業以来初めてというものも数名あった。その変わり方にお互いからず、名乗り合う場面もあった。

金沢、加納両先生は夫々八十八才、七十八才という高齢ながら、尚かくしゃくたる御様子には既に五十才の坂を越した我々、同一段とファイトを燃した次第である。

お互に青山の懐旧談に花を咲かせ、時の経つのを忘れた。玲瓏の天の青山の校歌を一同壺声で張りあげて歌い、ついで両先生の健康と一同の健斗を祈りつつ万才を三唱、名残り惜しみつつ会を閉じた。

(山田記)

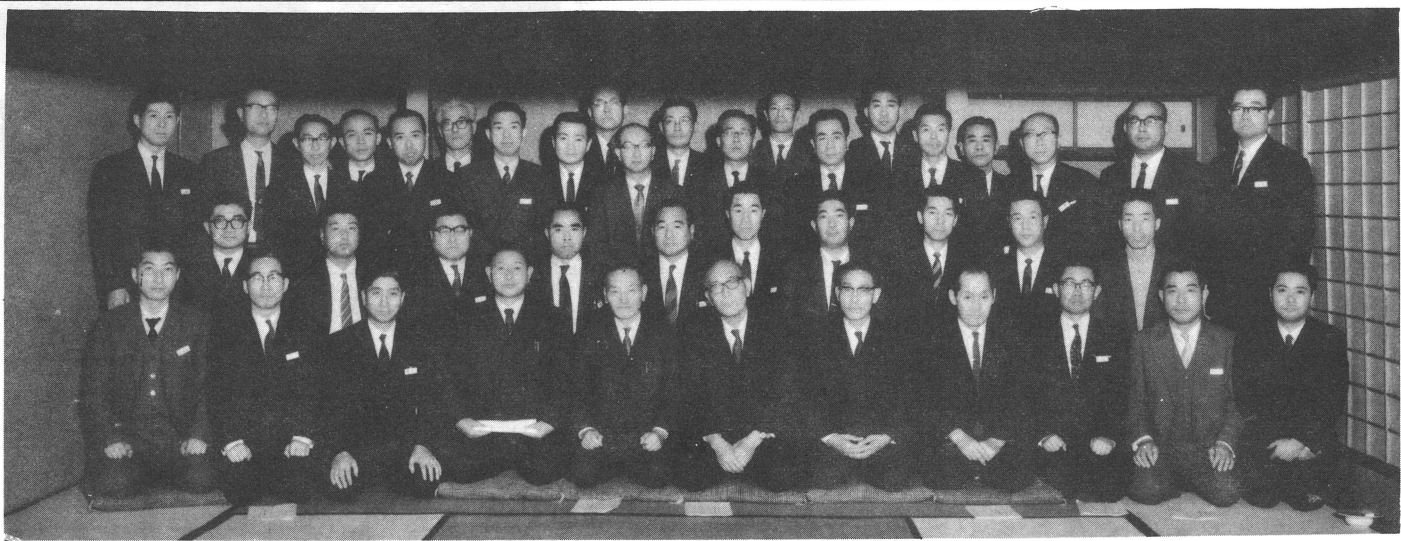
写真後列左より、岩浅倉治、布施栄信、桜井達雄、富沢(宣彦)、金子清、木村新、大森(吉田)基治、堀太郎、永井(松井)昇平、稲葉(田子)明、丹羽正樹、今成幸次、二列左より、今井正男、伊藤(櫻並)健伍、渡部富義、山田忠平、本間栄一郎、大井頭三、志賀潔、阿部久二、前列左より、本間敏雄、高橋英雄、金沢先生、加納先生、丸湯馨、茂野重蔵、山谷修一 (撮影 高橋正道)



## 青山管工株式会社

給排水衛生設備  
冷暖房上下水道  
浄化槽LPガス  
設計施工

(54・55回卒) 高井 真・斉藤成美  
松井 稔英・保倉 修  
相模谷 早稲草・片桐敏志  
新潟市笹口二八八番地  
電話 (47)〇五一三 (44)五五六七





# 青山剣友会の記

四十二年十一月三日。文化の日というのに、これはまた颯爽と、剣道具を肩に新潟高校の道場に集って来たサムライたち。

禿頭白髪、顔にしわはきざんでも、今は昔、天下のガタ中で、高橋イッセン先生直門の腕に年はとらせぬと意気揚々。「青山剣友会」の先輩たちである。



茨木 寛(48回)  
近藤 博(新大三)



## 中川忠作先生を招待 籠球教え子の集い

「巨漢」巨漢と言えば大正末期から昭和半期頃までの新潟中学校に籍を置かれた方々には忘れ難いことのない先生一人であり、思い出もそれぞれありのこと。

新潟中学校籠球部は大正十三年に発足し戦後県立新潟高校籠球部に引継がれ今日に至り益々活躍している。巨漢は新潟籠球部育ての親であり新潟籠球王国を造り上げた功労者の一人でもある。先生は今なお健在で富山市西福沢に居られ、新中籠球部先輩が戦後二回先生を新潟へお呼びしたが今回久々

## 水友会員 奥利根に参集

### 奥利根に参集

八月二四日水上温泉奥利根川畔『水明荘』に集合の檄に応じ馳参するもの三五、遠くは名古屋の勝又、日立の高野をはじめ、関東各地より山添、河内、高野、今井、鈴木、梅田、中野、北井の諸氏、新潟勢は喜壽に垂たるが尚馨鏗たる村山老を筆頭に、熊田、立川坂井、渡辺、佐藤、田辺に続いて榎木、江口、菅野等踵を接し集い来る。この日のため特につけられた恩師、生蕃、鷺尾先生を囲み久潤を舒す。

黒の国手の面々、一同啞然たるもよくぞ来てくれたと感嘆しきり、

折しも奥利根の川風俄かに涼を齎らし虫声四圍に湧きて華燭酌酒の興愈々盛り上る。はては霞たなびくの大合唱となり、馨鏗奥利根にこたえます。酒、肴つき夜も三更に及びれば、酔疲れし身を共に褥を並べ臥しにけるが同床異夢ならぬ異床同夢、夢は栄冠の涙から

歎息するうち、再会を誓い一同袂を別つ、嗚呼万斛の憾を長からん。

かくて一夜拾数刻、彼に接し我に触れ哀愁喜交々胸裡に去来する間に約せしことも左に記す。

- 一、次回は新潟で開催
  - 二、水友会名簿の再編集
  - 三、水友会誌の再刊
- 最後に今回の催しに当り地元山添大兄のご幹旋を得、盛會裡に終了せしを大いに欣びとす。一同に代りてお礼申上ぐ。(水野記)



この日三〇年振りの邂逅もあり願ひれば踏み越え来りし過去は何れも苦難の径ならぬはなく、よくぞ生き永らえて本日相見えたりの感切々たり。

午後七時宴に移る。微暈ただよふに従い往時に還り一同意氣軒昂日本海の荒海に鍛えし頃の、将又堀割、プール時代の梁山伯を彷彿せしむ様なり。宴半ばに至り、折から東京に開催中の学会を抜け出し、突然現れるは宮村、樋口、大



た写真帳を開き、果てること知らず楽しいひと時でもあった。翌十六日は午後母校体育館に關係者集まり先輩対現役の歓戦や交換座談会も有意義であった。先輩諸氏も満七十二才の元氣な先生をみて自分の年を忘れてしばしコートに球を追ったことも楽しく、これを終始笑顔でみておられた。先生の脳裏には往年の選手活躍振りが浮んで居たことであろう。その夜は先生を囲み大宴會が開かれた。昭和四年から十五回も青山クラブ主催県下籠球大会を川開き当日に催し当時の新潟毎日主催大会に次いだことも大きく話題となった。

会も時間を忘れる有様であったが頃合いをみて私が応援歌を歌い

席を立つと、期せずして諸先輩の円陣ができ、先生も加わり懐かしい応援歌が高らかに古町の夜空にこだました。在校当時は巨漢そのもので先生は大きく見えたが今は案外スマートに見えるのは年ばかりでなく我々の方が大きくなったことで我々の胸上げに軽々しさを感じさせた。これからは先生も我々も一年一儲けの積み重ねである。先生を永生させたいことを念じながら「巨漢万才」「先生達者で」のお別れ言葉を思い出しつつ記す。

第三六回生  
籠球五代主将  
入江亨(現在倉田記)

**青陵飲食街**  
(三)  
洋酒バー  
**バックス**  
ニューバックス

**豪雪の中で  
定例新年会**  
五十四・五回

「正月五日、午後五時、田辺寺會館、会費時価、応分の寄付を担はず、飛び入り大歓迎」

この合言葉の下に雪をついて定例参集したつものども三十五名、はるばる東浦三川村から、賀茂からと、それぞれ皆元氣な顔を

雪の古町をオーバーの襟をたてさまよう青陵紳士諸氏に福音をお熱い洋酒バーの、お熱い物語を一席。ぜひ一度ドアを押し、お熱い雰囲気のためされるようおすすめします。

西堀前通七番町、紅燈籠ならめく中に、ひとときおぼろだネオンが招く洋酒バー、「バックス」。有為転変のこの世界で、十年の歴史を誇る「バックス」は、古町通九番町會館今町ビル内に、「ニューバックス」を誕生させ、神話の世界に匹敵する夢の饗宴の場を供してきています。

この二つの店の主に登場してもらいます。六〇回卒の俊馬。

「田中亀二です。なにしろ県下を誇る新潟中学、新潟高校を通じて六年間お世話になつた(落着第でいたのでは)ありません。私、県下に誇る店を開きたいと、苦節十年この世界で励んで参りました。」なるほどこの人、田中亀二氏の経歴を知る人はその努力のほどを察するのです。

昭和三十三年、天下に名だたる英語界の名門、青山学院大学の教育学科を卒業した彼は、学生時代に

現在のグランドパバー「バックス」にまで成長させました。落ちついた雰囲気を楽しむ紳士諸君のため開店した今町ビルの「ニューバックス」は静かなムードの中で各種カクテル、

見せてくれた。

恩師沢山先生を囲んでおたがいに無事を祝い、早稲野作、樋口篤君の不幸をいたみ、わが同期生の協力によって成った「青山管工株式会社」の発展を祈るなど新中同期ならではの会となった。

お招きした阿部利三氏、宮部与一、阿部正先生が雪その他の御事情でお見えになれず、当日出席の返事があった十数名の姿が、現われなかったのは残念であった。御多幸を祈るや切である。

近いうち、新しい形式の店「サパークラブ(食事を中心に洋酒バー)」を開こうとしている田中氏をどうか励ましていただきたい。(上杉記)

熱烈な恋愛の末得た同大学同僚の才色兼備の現在のマダムを伴って帰郷しました。ホテルを営む父が健康を失ったからです。

彼の新しい世界での研究が始まったのです。在京中、才媛の現ママさんの度々のデートの想い出の場所、スナック喫茶、スナックバーでのヒントが決して無駄ではなかつたようです。殺風景な新潟市にスナックバーが降臨したいきさつが理解できようというものです。田中氏は更にアイデアを生かして現在のグランドパバー「バックス」にまで成長させました。落ちついた雰囲気を楽しむ紳士諸君のため開店した今町ビルの「ニューバックス」は静かなムードの中で各種カクテル、

クテルの格調高い味が楽しめるようになっていきました。

田中氏の研鑽は認められ、新潟洋酒バー組合副組合長の肩書で、公私共に多忙です。それというのもママさんの功績があればこそ、知性美豊かなママさんを慕って訪ねる客が絶えないとか。お熱い雰囲気のお店「バックス」、「ニューバックス」をぜひ探訪し美酒と美女に酔うのも避寒法の一つでしょう。

本店 グランドパバー・バックス 西堀七  
格調高いカクテル  
ビール③〇〇円、ハイボール②五〇円、豪華なおつまみ  
高性能ジュークボックス、マイク設備あり、ダンス可能。  
支店 ニューバックス 西堀七  
ムード豊かなカクテル  
ビール③〇〇円、ハイボール②五〇円、和風おつまみ、静かなくつろいだ雰囲気。特微。

